

金子勝 木村剛

宮崎哲弥

〈企画・進行〉

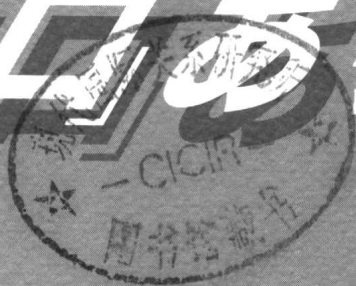
日本経済 出口あり



112
D2
958

金子勝 木村剛
宮崎哲弥
〈企画・進行〉

日本経済 『出口あり』



NB

春秋社 2001年12月18日

日本経済「出口」あり

二〇〇一年八月二五日 第一刷発行

著者

金子勝・木村剛・宮崎哲弥

発行者

神田明

発行所

株式会社春秋社

〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6

電話03-3255-9611

振替00180-6-24861

<http://www.shunjusha.co.jp/>

印刷

萩原印刷株式会社

©2001 KANEKO Masaru, KIMURA Takeshi, AlierBrain

Printed in Japan, Shunjusha.

ISBN4-393-62164-6

定価はカバー等に表示してあります

著者紹介

金子勝

(かねこ まさる)

一九五二年生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。法政大学教授などを経て、現在、慶應義塾大学経済学部教授。専門は財政学、地方財政論、制度の経済学。著書に『市場と制度の政治経済学』（東京大学出版会）、『経済学』『経済の倫理』（以上、新書館）、『セーフティネットの政治経済学』（ちくま新書）、『反グローバリズム』『市場』（以上、岩波書店）、『日本再生論』（NHKブックス）など。

木村剛

(きむら たけし)

一九六二年生まれ。東京大学経済学部卒業。八五年、日本銀行に入行。営業局、企画局、ニューヨーク事務所、国際局などを歴任。現在、金融に特化したコンサルティング会社・KPMGフィナンシャル株式会社の代表取締役社長。著書に『通貨が墮落するとき』『投資戦略の発想法』（以上、講談社）、『新しい金融検査の影響と対策』（KKC出版）ほか、共著に『日本』が破綻するとき』（実業之日本社）など。

宮崎哲弥

(みやざき てつや)

一九六二年生まれ。慶應義塾大学文学部社会学科卒業、法学部法律学科中退。広告会社研究員を経て、評論家。研究開発コンサルティングアルターブレイン」副代表。著書に『正義の見方』（新潮OH！文庫）、『身捨つるほどの祖国はありや』（文藝春秋）、『自分の時代』の終わり』（時事通信社）、『新世紀の美德』（朝日新聞社）ほか、共著に『愛と幻想の日本主義』『少年の罪と罰論』（以上、春秋社）など。

日本經濟「出口」あり
目次

B1/BF69/03

真に生まれ変わるために——金子勝……………8

「ルールなき資本主義」との訣別——木村剛……………10

第一章 マネーがいま、世界を徘徊する

13

デフレはプラスかマイナスか……………14

デフレになるほどマネーはだぶつく……………22

何がああバブルを膨らませたのか……………28

バブルは再びやって来る……………34

第二章 すべての無知と無責任から始まった

43

誤解まみれの不良債権処理問題……………44

粉飾経営者となまくら金融当局……………48

役人たちを責任論へ追いつめろ……………56

第三章

日本企業、そのシステムの問題

89

「骨太の方針」、ここが問題！……………	62
なんのためのペイオフ解禁……………	69
制度知らずの市場原理主義者たち……………	77
クルーグマン教授を俎に載せる……………	84
ITとは所詮、ツールである……………	90
IT革命を再び論ず……………	94
日本企業、そのシステムの問題……………	103
駄目なトップは退出させよ……………	110
どうなる？ 日本雇用関係……………	115
世代交代にこそ希望は宿る……………	121
ルールなき日本の雇用、その未来……………	125

第四章 自立への道・自滅への道

131

いま地域経済が危ない……………	132
なぜ地域経済が大切なのか……………	141
「食」の確保と安全性という問題……………	147
国家戦略としての農業……………	152
偽りに満ちた国家財政……………	156
わかち合いの年金制度へ……………	159
公的年金の脱退権を認めよ……………	165
食い逃げ世代とパラサイト・シングル……………	169

第五章 日本改造、ここから始めよ

177

暮らしの安心へ向け大胆な改革を……………	178
経済再生、その十分条件とは？……………	184
「規律」なき社会にNoを！……………	189

第六章 日本再生へ向けて

215

最初の一撃は政治から始めよ……………	195
日本が金融外交に勝てない理由……………	201
悲しいぐらい踊らされる国・日本……………	207
誰もが公共空間に参加できる社会へ……………	216
リーダーは四〇代前半に任せよ……………	218
ルールの注人と債務管理型国家……………	220
「底割れ」しない地点を見極めよ……………	225
粉飾社会からフェアな社会へ……………	227
本当に守るべき理念の確立を……………	231
なによりまず「事実」を直視せよ……………	236
ここにしか「出口」はない——宮崎哲弥……………	241



ブックサイン……鈴木一誌

日
本
經
濟「出
口」あ
り

真に生まれ変わるために

金子勝

世界同時不況が忍び寄ってきている。アメリカのITバブルが弾けた余波を受けて、日本だけでなく世界中で景気減速が進んでいる。アルゼンチンやトルコと並んで、日本は経済破綻が懸念される国の一つと見なされている。デフレの進行と不良債権累積によって、再び金融シテムが破綻するとの疑念が生じているからだ。昨年末から著者が警告してきたとおりに事態は推移している。しかし、日本国内は相変わらずトンチンカンな小泉ブームに酔っている。

何度も何度も同じ失敗を犯すのは愚かなことだ。同じ誤りとは、二〇〇一年四月六日の緊急経済対策と六月二日に経済財政諮問会議が出した「骨太」方針を指している。確かに、アメリカ政府の要求を背景にして、ようやく不良債権処理が最優先課題とされた。だが、その内容はこれまで失敗を繰り返してきたパターンそのものである。断言しよう。これは改革でも手術でもない。決定的に欠けているのは、過去の失敗から学ぶという姿勢である。

残念ながら、いまだに日本は、とうに過ぎ去った冷戦時代の政策対立軸に縛られている。「景気対策か財政再建か」といったピンボケな議論のことだ。バブルが崩壊して以降、日本経済

は、この両者の間を左右に振れながら沈んできた。まず例外なき規制緩和論は一九九五年の第一次金融システム不安に帰結した。景気対策と住専への公的資金投入によつて景気が立ち直り始めると、一九九七年に再び財政構造改革に突っ込んで、第二次金融システム不安を引き起こした。その後は、膨大な財政赤字で景気対策が実施されたが効果はなかった。そして再び小泉「構造改革」である。ただ同じことを繰り返しているだけなのだ。

病気の原因を取り除かないかぎり、経済は立ち直れるはずがない。やるべきことはつきりしている。まず不良債権のゴマカシを止めさせ一斉査定を行うことだ。つぎに、銀行の経営者責任と監督官庁の責任を問いつつ、自己資本不足に陥る銀行には公的資金を投入する。そして銀行から産業あるいは中小企業に資金が流れるような法的な縛りをかけることも必要だ。その間、デフレを防ぐ政策をとらなければならない。しかし膨大な財政赤字を抱えている。だとすれば、利益政治の温床を断ち切りつつ財政資金の流れを大胆に変えるしかない。この国は、本当に生まれ変わらなければならないのだ。

だが、巷では、目まぐるしく言うことが変わる経済学者や経済評論家が闊歩している。御用学者は信用できない。確かに、いくつかの点で木村剛氏と私は考え方が違う。しかし、木村氏は何よりも事実を直視する勇氣と能力を持っている。この人となら議論ができると思った。

「ルールなき資本主義」との訣別

木村剛

金子勝氏と私は異なる価値観を持っている。そして、異なる立場と角度から経済メカニズムを観察している。本来であれば、口角泡を飛ばして激論を戦わすべき犬猿の組み合わせなのかもしれない。世が世なら、私は、金子氏から「市場原理主義者」として、指弾される立場にあつたはずだ。しかし、今回の対談において、少なからぬ重要な論点に関して意見が合致してしまつたことに、正直言つて驚いてしまつた。不良債権や財政赤字の問題、あるいは、外交問題に關して、ここまで主張が寄り添うものとは想像もしていなかつた。

ただしこれは、金子氏あるいは私が、互いのポリシーを^ま枉げて譲歩したということではない。日本経済の現状が余りにも異常であるがために、異なる価値観を持つ二人をして、同様の見解を持つに至らしめたのだ。その事実、金子氏の次のコメントに凝縮されている。

「もともと私は市場原理主義に批判的だし、立場で言つたら本当は、マーケットを規制しても弱者は守らなければいけないという立場なのに、「まっとうな国際競争をしろ」「まっとうな資本主義になれ」という主張をしている……。そのこと自体がおかしいんだよ、文脈か

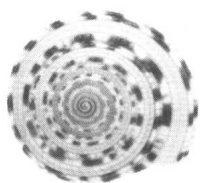
ら言つたら笑。それぐらい日本は常識外れなんだつて。「まっとうな市場競争」すら、するつもりがないんだ、この国は。」

まさにそのとおりである。われらが日本は、「まっとうな市場競争」すら、するつもりのない国に成り下がってしまった。「まっとうな資本主義」でなくなつてしまった。われわれの将来不安が湧き出る水源地はそこだ。日本経済が直面している最大の課題はじつはそこにある。

「まっとうな市場競争」とは、自由な市場競争を意味しない。自由な市場競争が資本効率を向上するためには、私的財産が国家権力によって保護され、契約履行が司法制度によって担保されている必要がある。そうでなければ、ルール無用の悪党が支配する暴力資本主義へと堕してしまうだろう。自由競争の前には、ルール遵守が確立されなければならないのである。

ところが現実はどうだ。銀行は十分な引当をしようとしないうし、債務者は借りたカネを返さうとしない。経営に失敗しても経営者は退場しない。これが「まっとうな資本主義」と言えるであろうか。まずわれわれは、ルールのある資本主義を取り戻し、レフェリーが機能するフェアな市場競争を復活させなければならない。すべての復活はそこから始まる。

復活へと向かう難行苦行の中でこそ、ニッポン・スタンダードは磨き上げられていく。その結果、日本がセリーグから大リーグへと変貌できるなら、日本経済に「出口」はある。



第二章

マナーがいま、世界を徘徊する